

ガラテヤ人への手紙

第一章

一人々からでもなく、人によってでもなく、イエス・キリストと彼を死人の中からよみがえらせた父なる神とによって立てられた使徒パウロ、二ならびにわたしと共にいる兄弟たち一同から、ガラテヤの諸教会へ。

三 わたしたちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安とが、あなたがたにあるように。四 キリストは、わたしたちの父なる神の御旨に従い、わたしたちを今の悪の世から救い出そうとして、ご自身をわたしたちの罪のためにささげられたのである。五 栄光が世々限りなく神にあるように、アアメン。

六 あなたがたがこんなにも早く、あなたがたをキリストの恵みの内へお招きになったかたから離れて、違った福音に落ちていくことが、わたしには不思議でならない。七 それは福音というべきものではなく、ただ、ある種の人々があなたがたをかき乱し、キリストの福音を曲げようとしているだけのことである。八 しかし、たといわたしたちであろうと、天からの御使であろうと、わたしたちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら、その人はのろわるべきである。九 わたしたち

が前に言っておいたように、今わたしは重ねて言う。もしある人が、あなたがたの受け入れた福音に反することを宣べ伝えているなら、その人はのろわるべきである。

一〇 今わたしは、人に喜ばれようとしているのか、それとも、神に喜ばれようとしているのか。あるいは、人の歡心を買おうと努めているのか。もし、今もなお人の歡心を買おうとしているとすれば、わたしはキリストの僕ではあるまい。

一二 兄弟たちよ。あなたがたに、はっきり言っておく。

わたしは宣べ伝えた福音は人間によるものではない。

一三 わたしは、それを人間から受けたのでも教えられたのでもなく、ただイエス・キリストの啓示によったのである。一四 エダヤ教を信じていたころのわたしの行動については、あなたがたはすでによく聞いている。すなわち、

わたしは激しく神の教会を迫害し、また荒しまわっていた。一五 そして、同国人の中でわたしと同年輩の多くの者にまさってエダヤ教に精進し、先祖たちの言伝えに對して、だれよりもはるかに熱心であった。一六 ところが、母の胎内にある時からわたしを聖別し、み恵みをもってわたしをお召しになったかたが、一七 異邦人の間に宣べ伝えさせるために、御子をわたしの内に啓示して下さった時、わたしは直ちに、血肉に相談もせず、一八 また先輩の使徒たちに会うためにエルサレムにも上らず、アラビヤに出で行った。それから再びダマスコに帰った。

一八その後三年たつてから、わたしはケバをたずねてエルサレムに上り、彼のもとに十五日間、滞在した。一九しかし、主の兄弟ヤコブ以外には、ほかのどの使徒にも会わなかった。二〇ここに書いていることは、神のみまえて言うが、決して偽りではない。三その後、わたしはシリヤとキリキヤとの地方に行った。三しかし、キリストにあるユダヤの諸教会には、顔を知られていなかった。三ただ彼らは、「かつて自分たちを迫害した者が、以前には撲滅しようとしていたその信仰を、今は宣べ伝えてゐる」と聞き、二四わたしのことで、神をほめたたえた。

第二章 「その後十四年たつてから、わたしはバルナバと一緒に、テトスをも連れて、再びエルサレムに上った。二そこに上ったのは、啓示によつてである。そして、わたしが異邦人の間に宣べ伝えてゐる福音を、人に示し、「重だつた人たち」には個人的に示した。それは、わたしが現に走つており、またすでに走つてきたことが、むだにならないためである。三しかし、わたしが連れていたテトスでさえ、ギリシヤ人であつたのに、割礼をしいられなかった。四それは、忍び込んできたにせ兄弟らがいたので——彼らが忍び込んできたのは、キリスト・イエスにあつて持つてゐるわたしたちの自由をねらつて、わたしたちを奴隷にするためであつた。五わたしたちは、福音の真理があなたがたのもとに常にとどまつてゐるように、瞬時も彼らの強要に屈服しなかつた。

六そして、かの「重だつた人たち」からは——彼らがどんな人であつたにしても、それは、わたしには全く問題ではない。神は人を分け隔てなさらないのだから——事実、かの「重だつた人たち」は、わたしに何も加えることをしなかつた。七それどころか、彼らは、ペテロが割礼の者への福音をゆだねられてゐることに、わたしには無割礼の者への福音がゆだねられてゐることを認め、八（というのは、ペテロに働きかけて割礼の者への使徒の務につかせたかたは、わたしにも働きかけて、異邦人につかわして下さつたからである）、九かつ、わたしに賜つた恵みを知つて、柱として重んじられてゐるヤコブとケバとヨハネとは、わたしとバルナバとに、交わりの手を差し伸べた。そこで、わたしたちは異邦人に行き、彼らは割礼の者に行くことになつたのである。一〇ただ一つ、わたしたちが貧しい人々をかえりみるようにとのことであつたが、わたしはもとより、この事のためにも大いに努めてきたのである。

二ところが、ケバがアンテオケにきたとき、彼に非難すべきことがあつたので、わたしは面とむかつて彼をなした。三というのは、ヤコブのもとからある人々が来るまでは、彼は異邦人と食を共にしてゐたのに、彼らが出てからは、割礼の者どもを恐れ、しだいに身を引いて離れて行つたからである。三そして、ほかのユダヤ人たちも彼と共に偽善の行為をし、バルナバまでがそのよう

な偽善に引きずり込まれた。「四彼らが福音の真理に従つてまっすぐに歩いていないのを見て、わたしは衆人の面前でケバに言った、「あなたは、ユダヤ人であるのに、自分自身はユダヤ人のように生活しないで、異邦人のように生活していながら、どうして異邦人にユダヤ人のようになることをしいるのか」。

「五わたしたちは生れながらのユダヤ人であつて、異邦人なる罪人ではないが、六人の義とされるのは律法の行いによるのではなく、ただキリスト・イエスを信じる信仰によることを認めて、わたしたちもキリスト・イエスを信じたのである。それは、律法の行いによるのではなく、キリストを信じる信仰によって義とされるためである。なぜなら、律法の行いによっては、だれひとり義とされることがないからである。七しかし、キリストにあつて義とされることを求めることによって、わたしたち自身が罪人であるとされるのなら、キリストは罪に仕える者なのであろうか。断じてそうではない。八もしわたしが、いったん打ちこわしたものを、再び建てるとすれば、それこそ、自分が違反者であることを表明することになる。九わたしは、神に生きるために、律法によって律法に死んだ。わたしはキリストと共に十字架につけられた。十生きてゐるのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあつて生きてゐるのは、わた

しを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きてゐるのである。三わたしは、神の恵みを無にはしない。もし、義が律法によって得られるとすれば、キリストの死はむだであつたことになる。

第三章 「ああ、物わりのわるいガラテヤ人よ。十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの目の前に描き出されたのに、いったい、だれがあなたがたを惑わしたのか。二わたしは、ただこの一つの事を、あなたがたに聞いてみたい。あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行つたからか、それとも、聞いて信じただからか。三あなたがたは、そんなに物わかりがわるいのか。御霊で始めたのに、今になって肉で仕上げるというのか。四あれほどの大きな経験をしたことは、むだであつたのか。まさか、むだではあるまい。五すると、あなたがたに御霊を賜い、力あるわざをあなたがたの間でなされたのは、律法を行つたからか、それとも、聞いて信じたからか。

六このように、アブラハムは「神を信じた。それによって、彼は義と認められた」のである。七だから、信仰による者こそアブラハムの子であることを、知るべきである。八聖書は、神が異邦人を信仰によって義とされることを、あらかじめ知って、アブラハムに、「あなたによつて、すべての国民は祝福されるであらう」との良い知ら

せを、予告したのである。九このように、信仰による者は、信仰の人アブラハムと共に、祝福を受けるのである。一〇いったい、律法の行いによる者は、皆のろいの下にある。「律法の書に書いてあるいっさいのことを守らず、これを行わない者は、皆のろわれる」と書いてあるからである。二そこで、律法によっては、神のみまえに義とされる者はひとりもないことが、明らかである。なぜなら、「信仰による義人は生きる」からである。三律法は信仰に基いているものではない。かえって、「律法を行う者は律法によって生きる」のである。四キリストは、わたしたちのためにのろいとなって、わたしたちを律法ののろいからあがない出して下さった。聖書に、「木にかけられる者は、すべてののろわれる」と書いてある。五それは、アブラハムの受けた祝福が、イエス・キリストにあつて異邦人に及ぶためであり、約束された御霊を、わたしたちが信仰によって受けるためである。六兄弟たちよ。世のならわしを例にとつて言おう。人間の遺言でさえ、いったん作成されたら、これを無効にしたり、これに付け加えたりすることは、だれにもできない。七さて、約束は、アブラハムと彼の子孫とに對してなされたのである。それは、多数をさして「子孫たち」とに「と言わずに、ひとりをさして「あなたの子孫とに」と言っている。これは、キリストのことである。八わたしの言う意味は、こうである。神によってあらかじめ立

てられた契約が、四百三十年の後にできた律法によって破棄されて、その約束がむなしくなるようなことはない。九もし相続が、律法に基いてなされるとすれば、もはや約束に基いたものではない。ところが事実、神は約束によって、相続の恵みをアブラハムに賜ったのである。一〇それでは、律法はなんであるか。それは違反を促すため、あとから加えられたのであつて、約束されていた子孫が来るまで存続するだけのものであり、かつ、天使たちをおし、仲介者の手によって制定されたものにすぎない。一一仲介者なるものは、一方だけに属する者ではない。一二しかし、神はひとりである。三では、律法は神の約束と相いれないものか。断じてそうではない。もし人を生かす力のある律法が与えられていたとすれば、義はたしかに律法によって実現されたであらう。三しかし、約束が、信じる人々にイエス・キリストに對する信仰によって与えられるために、聖書はすべての人を罪の下に閉じ込めたのである。四しかし、信仰が現れる前には、わたしたちは律法の下で監視されており、やがて啓示される信仰の時まで閉じ込められていた。五このようにして律法は、信仰によって義とされるために、わたしたちをキリストに連れ行く養育掛となつたのである。六しかし、いったん信仰が現れた以上、わたしたちは、もはや養育掛のもとにはいない。七あなたがたはみな、キリスト・イエスにあ

る信仰によって、神の子なのである。三キリストに合うバプテスマを受けたあなたがたは、皆キリストを着たのである。二八もはや、ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからである。二九もしキリストのものであるなら、あなたがたはアブラハムの子孫であり、約束による相続人なのである。

第四章 「わたしの言う意味は、こうである。

相続人が子供である間は、全財産の持ち主でありながら、僕となんの差別もなく、二父親の定めた時期までは、管理人や後見人の監督の下に置かれていたのである。三それと同じく、わたしたちも子供であった時には、いわゆるこの世のもろもろの霊力の下に、縛られていた者であった。四しかし、時の満ちるに及んで、神は御子を女から生れさせ、律法の下に生れさせて、おつかわしになった。五それは、律法の下にある者をあがない出すため、わたしたちに子たる身分を授けるためであった。六このように、あなたがたは子であるのだから、神はわたしたちの心の中に、「アバ、父よ」と呼ぶ御子の霊を送って下さったのである。七したがって、あなたがたはもはや僕ではなく、子である。子である以上、また神による相続人である。

八神を知らなかった当時、あなたがたは、本来神ならぬ神々の奴隷になっていた。九しかし、今では神を知っ

ているのに、否、むしろ神に知られているのに、どうして、あの無力で貧弱な、もろもろの霊力に逆もどりして、またもや、新たにその奴隷になろうとするのか。一〇あなたがたは、日や月や季節や年などを守っている。二わたしは、あなたがたのために努力してきたことが、あるいは、むだになったのではないかと、あなたがたのことが心配でならない。

三兄弟たちよ。お願いする。どうか、わたしのようになってほしい。わたしも、あなたがたのようになったのだから。あなたがたは、一度もわたしに対して不都合なことをしたことはない。三あなたがたも知っているところ、最初わたしがあなたがたに福音を伝えたのは、わたしの肉体が弱っていたためであった。四そして、わたしの肉体にはあなたがたにとって試練となるものがあつたのに、それを卑しめもせず、またきらいもせず、かえってわたしを、神の使がキリスト・イエスかでもあるように、迎えてくれた。五その時のあなたがたの感激は、今どこにあるのか。はつきり言うが、あなたがたは、できることなら、自分の目をえぐり出してでも、わたしにくれたかったのだ。一六それなのに、真理を語ったために、わたしはあなたがたの敵になったのか。一七彼らがあなたがたに対して熱心なのは、善意からではない。むしろ、自分らに熱心にならせるために、あなたがたをわたしから引き離そうとしているのである。一八わたしがあなたが

たの所にいる時だけでなく、いつも、良いことについて熱心に慕われるのは、良いことである。「九ああ、わたしは幼な子たちよ。あなたがたの内にキリストの形がでるまでは、わたしは、またもや、あなたがたのために産みの苦しみをする。二〇できることなら、わたしは今あなたがたの所において、語調を変えて話してみたい。わたしは、あなたがたのことで、途方にくれている。

三律法の下にとどまっていたと思う人たちよ。わたしに答えなさい。あなたがたは律法の言うところを聞かないのか。三そのしるすところによると、アブラハムにふたりの子があったが、ひとりには女奴隷から、ひとりには自由の女から生れた。三女奴隷の子は肉によって生れたのであり、自由の女の子は約束によって生れたのであった。二五さて、この物語は比喩としてみられる。すなわち、この女たちは二つの契約をさす。そのひとはシナイ山から出て、奴隷となる者を産む。ハガルがそれである。二五ハガルといえは、アラビヤではシナイ山のこと、今のエルサレムに当る。なぜなら、それは子たちと共に、奴隷となつてゐるからである。二六しかし、上なるエルサレムは、自由の女であつて、わたしたちの母をさす。二七すなわち、こう書いてある、

「喜べ、不妊の女よ。」

声をあげて喜べ、産みの苦しみを知らない女よ。ひとり者となつてゐる女は多くの子を産み、

その数は、夫ある女の子らよりも多い。二八兄弟たちよ。あなたがたは、イサクのように、約束の子である。二九しかし、その当時、肉によって生れた者が、霊によって生れた者を迫害したように、今でも同様である。三〇しかし、聖書はなんと言つてゐるか。「女奴隷とその子とを追ひ出せ。女奴隷の子は、自由の女の子と共に相続をしてはならない」とある。三二だから、兄弟たちよ。わたしたちは女奴隷の子ではなく、自由の女の子なのである。

第五章

自由を得させるために、キリストはわたしたちを解放して下さつたのである。だから、堅く立つて、二度と奴隷のくびきにつながらてはならない。

二見よ、このパウロがあなたがたに言う。もし割礼を受けるなら、キリストはあなたがたに用のないものになる。三割礼を受けようとするすべての人たちに、もう一度言つておく。そういう人たちは、律法の全部を行う義務がある。四律法によつて義とされようとするあなたがたは、キリストから離れてしまつてゐる。恵みから落ちてゐる。五わたしたちは、御霊の助けにより、信仰によつて義とされる望みを強くいだいてゐる。六キリスト・イエスにあつては、割礼があつてもなくても、問題ではない。尊いのは、愛によつて働く信仰だけである。

七あなたがたはよく走り続けてきたのに、だれが邪魔をして、真理にそむかせたのか。八そのような勧誘は、

あなたがたを召されたかたから出たものではない。九少
しのパン種でも、粉のかたまり全体をふくらませる。
「あなたがたはいささかもわたしと違った思いをいだく
ことはない」と、主にあって信頼している。しかし、あな
たがたを動揺させている者は、それがだれであろうと、
さばきを受けるであろう。二兄弟たちよ。わたしがもし
今でも割礼を宣べ伝えていたら、どうして、いまなお迫
害されるはずがあるうか。そうしていたら、十字架のつ
まづきは、なくなっているであろう。三あなたがたの煽
動者どもは、自ら不具になるがよからう。

三兄弟たちよ。あなたがたが召されたのは、実に、自
由を得るためである。ただ、その自由を、肉の働く機会
としないで、愛をもって互に仕えなさい。四律法の全体
は、「自分を愛するように、あなたの隣人を愛せよ」と
いうこの一句に尽きるからである。一五氣をつけるがよ
い。もし互にかみ合い、食い合っているなら、あなたが
たは互に滅ぼされてしまうだろう。

一六わたしは命じる、御霊によって歩きなさい。そうす
れば、決して肉の欲を満たすことはない。一七なぜなら、
肉の欲するところは御霊に反し、また御霊の欲するところ
は肉に反するからである。こうして、二つのものは互
に相さからい、その結果、あなたがたは自分でしようと
思うことを、することができないようになる。一八もし
あなたがたが御霊に導かれるなら、律法の下にはいな

い。一九肉の働きは明白である。すなわち、不品行、汚れ、
好色、二偶像礼拝、まじない、敵意、争い、ねえみ、怒
り、党派心、分裂、分派、三ねたみ、泥酔、宴楽、およ
び、そのたぐいである。わたしは以前も言ったように、
今も前もって言っておく。このようなことを行う者は、
神の国をつぐことがない。三しかし、御霊の実は、愛、
喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、三三柔和、自制で
あって、これらを否定する律法はない。二四キリスト・
イエスに属する者は、自分の肉を、その情と欲と共に十
字架につけてしまったのである。

二五もしわたしたちが御霊によって生きるのなら、また
御霊によって進むうではないか。二六互にいどみ合い、互
にねたみ合って、虚栄に生きてはならない。

第六章

一兄弟たちよ。もしもある人が罪過に
陥っていることがわかったなら、霊の人であるあなたが
たは、柔和な心をもって、その人を正しなさい。それと
同時に、もしか自分自身も誘惑に陥ることがありはしな
いかと、反省しなさい。二互に重荷を負い合いなさい。
そうすれば、あなたがたはキリストの律法を全うするで
あらう。三もしある人が、事実そうでないのに、自分が
何か偉い者であるように思っているとすれば、その人は
自分を欺いているのである。四ひとりびとり、自分の行
いを検討してみるがよい。そうすれば、自分だけには誇
ることができても、ほかの人には誇れなくなるである

う。五人はそれぞれ、自分自身の重荷を負うべきである。六御言を教えてもらう人は、教える人と、すべて良いものを分け合いなさい。七まちがってはいけない、神は侮られるようなかたではない。人は自分のまいたものを、刈り取ることになる。八すなわち、自分の肉にまく者は、肉から滅びを刈り取り、霊にまく者は、霊から永遠のいのちを刈り取るであろう。九わたしたちは、善を行うことに、うみ疲れてはならない。たゆまないでいると、時が来れば刈り取るようになる。一〇だから、機会のあるごとに、だれに対しても、とくに信仰の仲間に対して、善を行おうではないか。

二ごらんなさい。わたし自身いま筆をとって、こんなに大きい字で、あなたがたに書いていることを。三いたい、肉において見えを飾ろうとする者たちは、キリスト・イエスの十字架のゆえに、迫害を受けたくないばかりに、あなたがたにしいて割礼を受けさせようとする。

三事実、割礼のあるもの自身が律法を守らず、ただ、あなたがたの肉について誇りたいために、割礼を受けさせようとしているのである。四しかし、わたし自身には、わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇とするものは、断じてあつてはならない。この十字架につけられて、この世はわたしに対して死に、わたしもこの世に対して死んでしまったのである。五割礼のあるなしは問題ではなく、ただ、新しく造られることこそ、重要なのである。六この法則に従って進む人々の上に、平和とあわれみとがあるように。また、神のイスラエルの上にあるように。

七だれも今後は、わたしに煩いをかけないでほしい。わたしは、イエスの焼き印を身に帯びているのだから。八兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊と共にあるように、アメン。